

病害虫発生予察注意報(第4号)

平成30年12月7日
神奈川県農業技術センター

病害虫名：キュウリ黄化えそ病
作物名：キュウリ
病原名：メロン黄化えそウイルス (*Melon yellow spot virus : MYSV*)
媒介昆虫：ミナミキイロアザミウマ

1 発生地域：県内全域（冬春キュウリ栽培地域）

2 発生量：多

3 注意報発令の根拠

- (1) 平成30年11月の抑制キュウリ巡回調査におけるミナミキイロアザミウマの寄生葉率は、10.1%で過去6年で最も高く、黄化えそ病の発病株率も11.3%で過去6年で最も高い。(図1)
- (2) キュウリ栽培施設周辺に設置した青色粘着トラップにおける11月のミナミキイロアザミウマの誘殺数は、過去5年で最も多い。(図2)
- (3) 11月29日発表の関東甲信地方の1ヶ月予報(気象庁発表)では、12月の気温は高い確率が70%であり、ミナミキイロアザミウマの生息に好適な条件が続くと考えられる。
- (4) 抑制キュウリ栽培で黄化えそ病の発病が多かったため、黄化えそウイルスを保有したミナミキイロアザミウマが増加している可能性が高く、冬春キュウリでのミナミキイロアザミウマの寄生と、それが媒介する黄化えそ病の発生が増加する恐れがある。

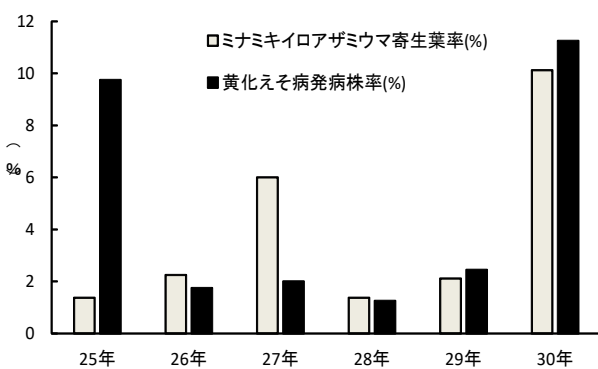


図1 抑制キュウリ巡回調査(11月)におけるミナミキイロアザミウマ寄生葉率及びキュウリ黄化えそ病発病株率の推移

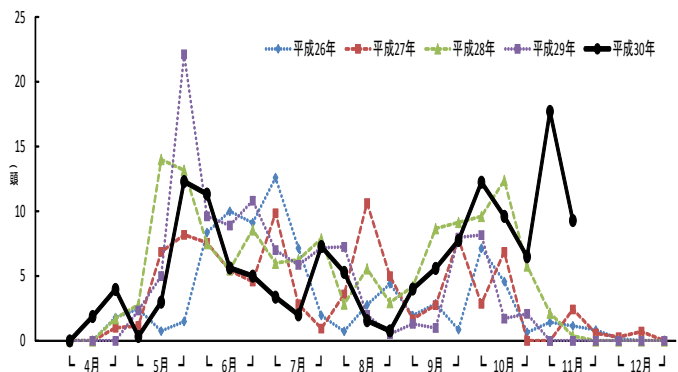


図2 青色粘着トラップへのミナミキイロアザミウマ誘殺数の推移



図3 キュウリ葉に寄生したミナミキイロアザミウマ



図4 キュウリ黄化えそ病の症状

4 防除対策

- (1) 抑制キュウリ栽培終了後は、株を抜根または株元を伐採しキュウリを枯死させた後、ハウスを閉め切り、蒸し込みによりミナミキイロアザミウマを死滅させ、施設外への拡散を防ぐ。残渣は完全に枯死した後、施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処分する。
- (2) ハウス内及び周囲の雑草はミナミキイロアザミウマの生息、増殖場所となるため、除草を徹底する。
- (3) ハウス開口部（天窗、側窓、出入口）には防虫ネットを設置しミナミキイロアザミウマの施設内への侵入を抑制する。防虫ネットは白色 0.4mm 目合以下または赤色 0.6mm 目合い以下のものを使用する。
- (4) 粘着トラップ（黄色または青色）を施設内に設置し、ミナミキイロアザミウマの早期発見に努める
- (5) 冬春キュウリの育苗期からミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。育苗はミナミキイロアザミウマの寄生や侵入の恐れがない場所で行い、苗は防虫ネットで被覆する。育苗時の粒剤施用、定植前の灌注剤施用または定植時の粒剤施用を行うとともに、生育初期から薬剤散布を行う。
なお、薬剤散布の際は同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤でのローテーション防除を行う。
- (6) 黄化えそ病感染苗による伝染源の持ち込みに注意し、感染が疑われる苗は使用しない。
- (7) 黄化えそ病発病株の早期発見に努め、発見した場合は直ちに抜き取り、土中に埋めるか完全に枯死するまでビニール袋などに入れ密封するなど適切に処分する。

5 防除薬剤

防除薬剤の例を表に示した。なお、農薬使用の際は、必ずラベルの記載事項を確認し、使用基準を遵守する。

表 キュウリのみナミキイロアザミウマ防除薬剤例

薬剤名	作用機構分類 (IRACコード)	施用方法	薬剤名	作用機構分類 (IRACコード)	施用方法
アドマイヤー1粒剤	4A	土壌施用	ダントツ水溶剤	4A	散布
アルバリンまたはスタークル粒剤	4A		アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤	4A	
ダントツ粒剤	4A		ベストガード水溶剤	4A	
ベストガード粒剤	4A		モスピラン顆粒水溶剤	4A	
プリロツソ粒剤	28		ディアナSC	5	
モベントフロアブル	23	株元灌注	スピノエース顆粒水和剤	5	
ベリマークSC	28		アフーム乳剤	6	
			アフームエクセラ顆粒水和剤	6+15	
			カスケード乳剤	15	
			ハチハチ乳剤	21A	
			モベントフロアブル	23	
			ベネビアOD	28	
			プレオフロアブル	UN	

神奈川県農業技術センター
 病害虫防除部
 〒259-1204 平塚市上吉沢1617
 TEL 0463-58-0333
 FAX 0463-59-7411
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/cf7/cnt/f450002/>